【6】東園鹿子母講堂を仏在処・説処とする聖典 (1)

（1）参考のために、本「モノグラフ」第８号に掲載した「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧」の東園鹿子母講堂の項にあげられている経・律を掲げ、これに記されている記事を再録した。

［1］*DN.027 Aggañña-s.*（起世因本経　vol.Ⅲ　p.080）：そのときヴァーセッタとバーラドヴァージャが比丘の修行を欲して、比丘の仲間に入った。夕暮れどき、釈尊が坐禅より出定されて、東園鹿子母講堂より出て経行された。これを見たヴァーセッタがバーラドヴァージャと共に釈尊のもとにやって来た。釈尊が「そなた達は婆羅門出身の出家者であるが、婆羅門が非難し、罵倒しないか」と尋ねられると、ヴァーセッタが「婆羅門は『婆羅門種が最上の種族であり、他の種族は劣等である』などと非難する」と答えた。釈尊は「四姓にかかわらず、不善なる者もいれば、善なる者もいる。何人なりとも、解脱をめざす者こそ、四姓の最上者である。釈迦族がコーサラ国のパセーナディ王に対して、臣下の礼をとっているように、王は如来に対して謙遜なる態度をとっている。それは法を尊重するからである。その法より生じたものが、『法身』とも、『梵身』とも言う。いずれの四姓であろうとも、身と口と意を制御して、七覚支を修すれば、涅槃を得る」と説かれたのち、「明と行を具足せる者は、人天に於て第一人者である」という偈を唱えられる。

［2］『長阿含』005「小縁経」（大正 01　p.036 中）：そのとき釈尊は１２５０人の比丘らと共に、東園鹿子母講堂に居られた。ときに婆肆吒と婆羅豆婆遮という２人の婆羅門が釈尊のもとを訪れて出家したが、彼らが釈尊に近づくと、釈尊は「婆羅門出身者として修行する上で、何か非難されることがあるか」と尋ねられた。彼らは「婆羅門らが『我ら婆羅門種は第一であるのに、汝らはどうして清浄の種を捨てて、瞿曇の異法に入ったのか』と非難する」と答えた。そこで釈尊は「彼らは自ら『我が婆羅門種は梵天より出で、梵口より生じ、現に清浄を得て、後にも清浄となる』と言うが、我が無上正等覚の道では種姓を用いない。俗法はそれを用いるが、我が法はその憍慢心を除いて、さとりを成就するのである」と、善悪の業報や四姓の本縁などを説かれる。

［3］*MN.037 Cūḷataṇhāsaṅkhaya-s.*（愛尽小経　vol.Ⅰ　p.251）：そのとき帝釈天が釈尊のもとに現れて、「どのように比丘は愛尽解脱して、人天の最勝者となるのか」と尋ねた。釈尊は「『一切法は貪著に値しない』と聞いて、それを熟知し、三受の無常を随観して、離貪、滅、捨離を隨観すれば、取がない。取がなければ、涅槃する。これを略説すれば、愛尽解脱して人天の最勝者となる」と答えられた。ときにその近くにいた目連は忉利天に戻った帝釈天のもとを訪れて、かつて諸天が阿修羅との戦いに勝利して建設したヴェージャヤンタ（Ve-jayanta）宮殿で、釈尊の説かれた愛尽解脱の教えを確認した。再び戻った彼は釈尊のもとを訪れて、その教えを直接聞いて歓喜する。

［4］*MN.107 Gaṇakamoggallāna-s.*（算数家目犍連経　vol.Ⅲ p.001）：そのときガナカ・モッガッラーナ婆羅門が釈尊のもとにやって来て、「我々算数家が１、２、３と数え、順を追って学んでいくように、法や律もそのようにできるのか」と質問した。釈尊は「馬を調教するように、法や律も順を追って学んでいくことができる。先ず『具戒者たれ』と教え、次に『諸根の門を護れ』、『食に於て量を知るべし』、『昼と初夜と後夜には経行と

坐禅により、心を清浄にせよ。中夜には師子臥すべし』、『行住坐臥に於て、正念正知を成就せよ』、『ただ独り離れたる床座を受けよ』と順々に教えて、四禅を成就させる」と答えられた。すると婆羅門が「その教えを聞いて、弟子の誰もが涅槃を得ることができるのか」と尋ねた。そこで釈尊は「譬えば、王舎城へ至る道を聞いて、ある者は間違えて逆方向へ行き、ある者は王舎城に到達できるように、涅槃への道も同様である。それは私には如何ともし難い。ただ道を教えるのみである」と応えられた。かの婆羅門はこの教えを聞いて、三宝に帰依して優婆塞となる。

［5］『中阿含』144「算数目揵連経」（大正 01　p.652 上）：そのとき算数梵志目揵連が釈尊のもとにやって来て、「この東園鹿子母講堂が次第に建造されて完成したり、あるいは象を鈎で段々と調教したり、あるいは我らが算数を順々に学び終えるように、法や律はどのように成就するのか」と質問した。釈尊は「もし年少の比丘が初めて法や律を学ぼうとするならば、先ず『命にかけても、身口意の三業を清浄にせよ』と教え、さらに『四念処を修習せよ』、『六根門を護れ』、『行住坐臥に正知正念せよ』、『遠離独住禅観せよ』、『究竟して漏尽智を得よ』と教える」と答えられた。すると彼が「すべての弟子がそのように学べば、究竟智を得て涅槃するのか」と尋ねた。釈尊は「誰も彼もが涅槃を得るわけではない。例えば、王舎城への道を教えても、到達する者と、到達しない者がいるように、涅槃を得る者や得ない者がいる」と答えられた。彼はこの教えを聞き、三宝に帰依して優婆塞となる。

［6］*MN.109 Mahāpuṇṇama-s.*（満月大経　vol.Ⅲ p.015）：そのとき釈尊は布薩の１５日の満月の夜に、比丘らに囲まれて、露地に坐して居られた。ときに一人の比丘が「五取蘊は何を本としているのか」と質問した。釈尊は「五取蘊は欲を本とする。色蘊の施設は四大種が、受蘊と想蘊と行蘊の施設は触が、識蘊の施設は名色が因と縁である。有身見とは五蘊を“我である”とか、我を“五蘊あり”などと認めることであるから、これを認めなければ、有身見がなくなる。五蘊は無常である。無常なるものは苦である。苦なるものは無我である。無我なるものは“これは我所にあらず、我にあらず、我体にあらず”と、このように正しい智慧を以て如実に観ずるべきである。かくして有聞の聖弟子は五蘊を厭離し、離欲して解脱するのである」と説かれる。このとき６０人の比丘たちが諸漏より解脱する。

［7］*MN.110 Cūḷapuṇṇama-s.*（満月小経　vol.Ⅲ p.020）：そのとき釈尊は布薩の１５日の満月の夜に、比丘らに囲まれて、露地に坐して居られた。ときに釈尊は黙然としている比丘たちに「不正なる人が不正なる人を『かの人は不正なる人である』とか、あるいは不正なる人が正しき人を『かの人は正しき人である』と言えるか」と質問された。比丘たちが「いいえ」と答えると、釈尊は「その通りである。不正なる人は不正なる法を具足して、不正なる人の信仰、思念、言葉、業、見解があり、不正なる人の布施を行ずる。彼は死後、地獄や畜生に生れる」と説かれた。さらに釈尊は「正しき人が正しき人を『かの人は正しき人である』とか、あるいは正しき人が不正なる人を『かの人は不正なる人である』と言えるか」と質問された。比丘たちが「はい」と答えると、釈尊は「その通りである。正しき人は正しき法を具足して、正しき人の信仰、思念、言葉、業、見解があり、正しき人の

布施を行ずる。彼は死後、天や人に生れる」と説かれる。

［8］*MN.118 Ānāpānasati-s.*（入出息念経　vol.Ⅲ p.078）：そのとき釈尊は舎利弗、目連、摩訶迦葉、マハーカッチャーナ、マハーコッティカ、マハーカッピナ、マハーチュンダ、阿那律、レーヴァタ、阿難、その他の比丘らと共に居られた。その日は布薩の１５日で、自恣にあたっていたので、釈尊は満月の夜、比丘らに囲まれて、露地に坐された。このとき釈尊は比丘たちに「精進に勤めよ。私は雨期の第４の月、コームディー（komudī）(1) の満月を、ここ舎衛城で待つ」と告げられた。その間、長老比丘らが新学比丘を教授、教誡していたが、やがてコームディーの満月の夜、釈尊は比丘らに囲まれて、露地に坐された。すると釈尊は「ここに集まった比丘らの中には阿羅漢、不還、一来、預流を得た者、あるいは三十七道品（四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八聖道分）や四無量心（慈、悲、喜、捨）や不浄観や無常想や入出息念を修習する者がいる。この入出息念を修習して、四念処を完成させ、さらに四念処を修習して、七覚支を完成させれば、明と解脱とを完成させる」と説かれる。

(1)「コームディー（komudī）」とは、カッティカ月の満月の日をさす。

［9］*MN.121 Cūḷasuññata-s.*（空小経　vol.Ⅲ p.104）：夕方、阿難が独坐より出定して釈尊のもとを訪れ、「かつてナガラカ（Nagaraka）という釈迦族の町で、釈尊が『今、空住に多く住している』と告げられたのを憶えている」と語った。すると釈尊は「私は以前も、今も空住に多く住している。比丘たちも、村の想、住民の想、森林の想、大地の想、空無辺処の想、識無辺処の想、無所有処の想、非想非非想処の想、無相心定を修して、“無上の清浄なる空を成就して住しよう”と、このように学ぶべきである」と説かれる。

［10］『中阿含』190「小空経」（大正 01　p.736 下）：そのとき阿難が晡時に宴坐より出定して、釈尊のもとにやって来た。ときに彼が「釈尊は釈迦族の都邑（Nagaraka）に居られたとき、『阿難よ、我は多く空を行ずる』と語られた」と告げると、釈尊は「その時より今に至まで、私は多く空を行じている。もし比丘が多く空を行じようとするならば、村想、人想、無事想、地想、無量空処想、無量識処想、無所有処想、無想心定を念じて、無為心解脱を得るべし」と説かれる。

［11］*SN.003-002-001*（vol.Ⅰ p.077）：そのとき釈尊は夕方に独坐より出定して、門外の小屋に坐された。ときにパセーナディ王が釈尊のもとにやって来て、釈尊の傍らに坐した。そこへ各々７人の結髪行者（Jāṭil）、ニガンタの徒（Nigaṇṭh）、裸形の行者（Acelak）、一衣の行者（Ekasāṭak）、遊行者（Parib-bājak）が通り過ぎた。すると王が席を立って彼らを合掌し、再びもとへ戻て、釈尊に「彼らは阿羅漢であろうか」と尋ねた。釈尊は「在家者には、それを知ることは難しい。彼らの戒や清浄さや確実さや智慧を知るには、共に住んだり、共に語ったりなどして知り得る」と答えられたのち、「容貌にて人は知り難い。外面を見ただけで、信用してはならない。ある人々は内に不浄を懐き、外面を美しく装う」という偈を唱えられる。（相応経の雑阿含 1148　大正 02　p.305 下は仏在処を舎衛国祇樹給孤独園とし、別訳雑阿含 071　大正 02　p.399 上は舎衛国祇樹給孤独園とする）

［12］*SN.008-007*（vol.Ⅰ p.190）：そのとき釈尊は５００人の阿羅漢比丘たちと共に居

られた。その日は布薩の１５日で、自恣にあたっていたので、釈尊は比丘たちに囲まれて、露地に坐された。ときに釈尊は黙然としている比丘たちに「私に何らかの非難されるべきことがあるだろうか」と告げられると、舎利弗が「いいえありません。私にも何らかの非難されるべきことがありますか」と言った。釈尊は「そなたの身と語に、何ら非難されるべきことはない。この５００人の比丘たちにもない。そのうち６０人の比丘は三明を得た者、６０人の比丘は六神通を得た者、６０人の比丘は俱解脱を得た者、他は慧解脱を得た者である」と応えられた。このときヴァンギーサが「すべて釈尊の子であり、駄弁を弄するものはない。渇愛の矢を打ち砕いたもの、太陽の後裔を礼拝する」と偈を唱える。（相応経の雑阿含 1212　大正 02　p.330 上は仏在処を王舎城迦蘭陀竹園とし、別訳雑阿含 228　大正 02　p.457 上は王舎城迦蘭陀竹園とする）

［13］*SN.022-082*（vol.Ⅲ　p.100）：そのとき釈尊は布薩の１５日の満月の夜に、比丘たちに囲まれて、露地に坐して居られた。ときに一人の比丘が「五取蘊は何を本としているのか」と質問した。釈尊は「五取蘊は欲を本とする。色蘊の施設は四大種が、受蘊と想蘊と行蘊の施設は触が、識蘊の施設は名色が因と縁である。有身見とは五蘊を“我である”とか、我を“五蘊あり”などと認めることであるから、これを認めなければ、有身見がなくなる。五蘊は無常である。無常なるものは苦である。苦なるものは無我である。無我なるものは“これは我所にあらず、我にあらず、我体にあらず”と、このように正しい智慧を以て如実に観ずるべきである。かくして有聞の聖弟子は五蘊を厭離し、離欲して解脱するのである」と説かれる。

［14］『雑阿含』058（大正 02　p.014 中）：そのとき釈尊は晡時に禅より覚めて、講堂を出て、集会の前に座を敷いて、坐された。このとき釈尊は「五受陰とは色受陰、受受陰、想受陰、行受陰、識受陰である」と説かれた。すると一人の比丘が「五受陰は何を根とするのか」と質問した。釈尊は「五受陰は欲を根とし、欲の集、欲の生、欲の触である」と説かれる。

［15］*SN.048-041*（vol.Ⅴ　p.216）：そのとき釈尊は夕方に独坐より出定して、西の温かな場所に坐し、背を日で温められた。そこへ阿難が近づいて、釈尊の身体を手で摩りながら、「今や、釈尊の皮膚は皺が多く、身体は前に屈んでいる」と言った。すると釈尊は「その通りである。青年に老法があり、健康に病法があり、寿命に死法がある」と告げられたのち、「たとえ１００歳を生きるとも、死に至る。如何にしようとも避けられず、すべてを打ち砕く」という偈を唱えられる。

［16］*SN.051-014*（vol.Ⅴ p.269）：そのとき多数の比丘たちが東園鹿子母講堂にいたが、掉挙して憍慢となり、心を乱していた。ときに釈尊が目連に「彼らを目覚めさせるように」と命じられると、さっそく目連が神通力で講堂を揺り動かした。そこへ釈尊は赴き、驚いている比丘らに「私が目連に命じたのだ。彼がそのような神通力を現せるのは、四神足（欲三摩地勤行成就の神足、勤三摩地勤行成就の神足、心三摩地勤行成就の神足、観三摩地勤行成就の神足）を修習したからである。それにより彼は無漏の心解脱を成就している」と説かれる。

［17］*AN.002-004-005*（vol.Ⅰ　p.063）：ときに舎利弗が東園鹿子母講堂で、比丘たちに

「死後、内結ある人は還来者にして現状に還る。ところが外結ある人は不還者となり、現状に還らない」と説いていた。そこへ釈尊が天子の要請で祇樹給孤独園より赴いて、舎利弗に「『我らは根と意を寂静すべし』と学ぶべきである。そのように学べば、身と語と意の業は寂静となる。また『我らは同梵行者の間に寂静なるものをもたらそう』と、このように学ぶべきである」と教誡される。

［18］*AN.003-007-066*（vol. Ⅰ p.193）：そのときナンダカが舎衛城の東園鹿子母講堂に住していた。ときにミガーラの孫（Migāra-nattar）であるサールハとペークニヤの孫（Pe-khuṇiya-nattar）であるローハナがナンダカのもとへやって来た。ナンダカは「風説や伝説などを信じてはならない。『貪と瞋と癡は無益と苦を引き、無貪と無瞋と無癡は益と楽を引く』と自ら知見して、遠離し解脱すべきである」と教える。（この経には仏は登場せず）

［19］*AN.003-007-070*（vol. Ⅰ p.205）：そのときヴィサーカー・ミガーラマーターが布薩の日に、釈尊のもとを訪れた。釈尊は「布薩に３つある。すなわち①牧牛者の布薩は、日々の牛の飼育に、あれこれと心を砕くように、布薩の時も同様に貪欲心で過す、②ニガンタ（Nigaṇṭha）の布薩は、『杖を棄てよ』と非暴力を教え、布薩の当日には衣服を脱ぎ去るという行為で、無所有を勧めるが、いずれも大果はない。③聖者の布薩は、如来と法と僧伽と戒と天を随念することによって、心を浄化することであり、八斎戒（①殺生を断ち、②不与取を断ち、③非梵行を断ち、④妄語を断ち、⑤飲酒を断ち、⑥非時食を離れ、⑦舞踊・歌謡・音楽・観劇と華鬘・薫香・塗香を離れ、⑧高床・大床を断つこと）を行じて、死後、天に生れる」と説かれる。（相応経の増一阿含 024-006　大正 02　p.624 中は仏在処を舎衛国祇樹給孤独園とする）

［20］*AN.004-019-190*（vol. Ⅱ p.183）：そのとき布薩の日で、釈尊は比丘たちに「この中には天と梵と不動と聖を得て住する者がいる。①天を得て住する者とは四禅定を具足するものであり、②梵を得て住する者とは四無量心（慈心、悲心、喜心、捨心）を具足するものであり、③不動を得て住する者とは四無色定（空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処）を具足するものであり、④聖を得て住する者とは四諦を如実に知るものである」と説かれる。

［21］*AN.006-005-043*（vol. Ⅲ p.344）：ときに釈尊は托鉢後、阿難と共に東園鹿子母講堂へ来られた。そして夕暮れどき、釈尊は坐禅より出定し、沐浴のために、阿難と共に、プッバコッタカ河（Pubbakoṭṭhaka）へ向われる。

［22］*AN.008-002-020*（vol. Ⅳ p.204）：そのとき布薩の日で、釈尊は比丘たちに囲まれていた。ときに阿難が夜更けにやって来て、初夜と中夜の２度にわたり、釈尊に「比丘のために波羅提木叉を説くように」と告げたが、釈尊は黙然とされていた。後夜に再び告げると、釈尊は「この集会に不浄な者がいる」と告げられた。すると目連が破戒不浄の比丘を見つけ、その人のところへ行き、「共住してはならぬ」と３度告げて、門外に追い出した。かくして釈尊は「今より以後、そなた達が自ら布薩を行い、波羅提木叉を誦しなさい。比丘たちよ、大海には８つの未曾有法（①段々に深くなり、②岸を越えず、③死屍と共住せず、④大河が至れば名称なく、⑤増減を知らず、⑥一味であり、⑦種々の宝あり、⑧魚

など種々の衆生の住処であること）があるように、比丘は８つの未曾有法（①段々に学や所作や道があること、②学処を越えないこと、③破戒不浄の比丘と共住しないこと、④『沙門釈子』と称する四姓平等、⑤増減なき無余涅槃界、⑥一味の解脱味、⑦三十七菩提分、⑧四向四果）を見て、法や律を楽しむ」と説かれる。（相応経の増一阿含 048-002 大正 02　p.786 上は仏在処を舎衛国祇樹給孤独園とする）

［23］*AN.008-005-043*（vol.Ⅳ p.255）：そのときヴィサーカー・ミガーラマーターが釈尊のもとを訪れた。釈尊は「八支成就の布薩を修行すれば大果がある。すなわち①殺生を断ち、②不与取を断ち、③非梵行を断ち、④妄語を断ち、⑤飲酒を断ち、⑥非時食を離れ、⑦舞踊・歌謡・音楽・観劇と華鬘・薫香・塗香を離れ、⑧高床・大床を断つことで、死後、天に生れる」と、八斎戒について説かれる。

［24］*AN.008-005-047*（vol.Ⅳ p.267）：そのときヴィサーカー・ミガーラマーターが釈尊のもとを訪れた。釈尊は「八法成就の婦人は死して天に生れる。すなわち八法成就とは①夫のために早起きし、遅く寝て、好んで用務をなし、②夫が尊重する母や父、沙門や婆羅門を恭敬供養し、③夫の事業に熟達して怠らず、④夫の身内をよく熟知して世話をし、⑤夫のもたらした財産を保管し、⑥優婆塞となって三宝に帰依し、⑦殺生と不与取と欲邪行と妄語と不飲酒を離れ、⑧物惜しみを離れた心で家に住み、布施を喜ぶことである」などと説かれる。

［25］*AN.008-005-049*（vol.Ⅳ p.269）：そのときヴィサーカー・ミガーラマーターが釈尊のもとを訪れた。釈尊は「四法成就の婦人はこの世を獲得する。すなわち①よく事業を整えて、②周囲の人々をよく摂し、③夫の欲することを行い、④貯えたものをよく護ることである。さらに四法成就の婦人は来世を獲得する。すなわち⑤信を具足し、⑥戒を具足し、⑦捨を具足し、⑧慧を具足することである」と説かれる。

［26］*AN.008-005-050*（vol.Ⅳ p.271）：上記、*AN.008-005-049* に同じ。

［27］*Suttanipāta 003-012*（p.139）：そのとき釈尊は布薩の１５日の満月の夜に、比丘たちに囲まれて、屋外に坐して居られた。ときに釈尊は黙然としている比丘たちに「悟りに導く２つの法がある。２つとは“これは苦である”“これは苦集である”というのが１つの観察であり、“これは苦滅である”“これは苦滅に至らしめる道である”というのが２つ目の観察である。これによって現世に於ける了知を得るか、不還果を得る」と説かれたのち、「四諦を知る人々は心解脱、慧解脱を得て、生と老を受けない」などと偈を唱えられた。さらに「『苦は依（upadhi、生の素因）、無明、行、識、触、受、愛、取、起動、食、動揺などに縁って起る』というのが１つの観察であり、『それらを滅すれば、苦が生じない』というのが２つ目の観察である。これによって現世に於ける了知を得るか、不還果を得る」と各々を説いて、各偈を唱えられる。この教えを聞いた６０人の比丘たちが解脱する。

［28］*Udāna 002-009*（p.018）：そのときヴィサーカー・ミガーラマーターがパセーナディ王に直訴のことがあったが、王は彼女の意向通りに処理しなかった。そこで彼女は釈尊のもとを訪れて告げた。釈尊は「他に従属することはすべて苦である。あらゆる主権は楽である」というウダーナを唱えられる。

［29］*Udāna 005-005*（p.051）：そのとき布薩の日で、釈尊は比丘たちに囲まれていた。ときに阿難が夜更けにやって来て、初夜と中夜の２度にわたり、釈尊に「比丘のために波羅提木叉を説いて下さい」と告げたが、釈尊は黙然とされていた。後夜に、再び告げると、釈尊が「この集会に不浄な者がいる」と告げられた。すると目連が破戒不浄の比丘を見つけ、その人のところへ行き、「共住してはならぬ」と３度告げて、門外に追い出した。かくして釈尊は「今より以後、そなた達が自ら布薩を行い、波羅提木叉を誦しなさい。比丘たちよ、大海には８つの未曾有法（①段々に深くなり、②岸を越えず、③死屍と共住せず、④大河が至れば名称なく、⑤増減を知らず、⑥一味であり、⑦種々の宝あり、⑧魚など種々の衆生の住処であること）があるように、比丘は８つの未曾有法（①段々に学や所作や道があること、②学処を越えないこと、③破戒不浄の比丘と共住しないこと、④『沙門釈子』と称する四姓平等、⑤増減なき無余涅槃界、⑥一味の解脱味、⑦三十七菩提分、⑧四向四果）を見て、法や律を楽しむ」と説かれたのち、「（罪が）隠されば（罪が）さらに雨と降り、顕にされれば、さらには降らず。それゆえ（罪を）隠さず顕にせよ。そうすれば、さらに降ることはない」とウダーナを唱えられる。

［30］*Udāna 006-002*（p.064）：そのとき釈尊は夕方に独坐より出定して、門外の小屋に坐された。ときにパセーナディ王が釈尊のもとにやって来て、釈尊の傍らに坐した。そこへ各々７人の結髪行者（Jāṭil）、ニガンタの徒（Nigaṇṭh）、裸形の行者（Acelak）、一衣の行者（Ekasāṭak）、遊行者（Parib-bājak）が通り過ぎた。すると王が席を立って、彼らを合掌し、再びもとへ戻て、釈尊に「彼らは阿羅漢であろうか」と尋ねた。釈尊は「在家者には、それを知ることは難しい。彼らの戒や清浄さや確実さや智慧を知るには、共に住んだり、共に語ったりなどして知り得る」と答えたのち、「他に依存して生きるな。法によって生きよ」というウダーナを唱えられる。

［31］*Udāna 008-008*（p.091）：そのときヴィサーカー・ミガーラマーターの愛しい孫が死んで、彼女は濡れた衣装、濡れた髪のままで、釈尊のもとへやって来た。釈尊が「舎衛城では日々どれだけの人が死ぬであろうか」と尋ねられると、彼女は「日々１０人、あるいは９人乃至２人いる。１人ということもあるが、死人が出ないことはない」と答えた。すると釈尊は「１００人の愛しき者がいれば、１００の苦しみがある。９０人乃至１人の愛しき者がいれば、それに応じた苦しみがある。愛しき者を持たない人には苦もない」と説かれたのち、「この世で形あるものに、憂いや悲しみや苦しみとなるのは、愛しさを縁としている。この愛しさがないところに、憂いや悲しみや苦しみもない。さればこの世のどこでも、愛しさを募らせるべきではない」というウダーナを唱えられる。

［32］*Vinaya*「遮説戒犍度」（vol. II p.236）：そのとき布薩の日で、釈尊は比丘たちに囲まれていた。ときに阿難が夜更けにやって来て、初夜と中夜の２度にわたり、釈尊に「比丘のために波羅提木叉を説いて下さい」と告げたが、釈尊は黙然とされていた。後夜に、再び告げると、釈尊が「この集会に不浄な者がいる」と告げられた。すると目連が破戒不浄の比丘を見つけ、その人のところへ行き、「共住してはならぬ」と３度告げて、門外に追い出した。かくして釈尊は「今より以後、そなた達が自ら布薩を行い、波羅提木叉を誦しなさい。比丘たちよ、大海には８つの未曾有法（①段々に深くなり、②岸を越えず、③

死屍と共住せず、④大河が至れば名称なく、⑤増減を知らず、⑥一味であり、⑦種々の宝あり、⑧魚など種々の衆生の住処であること）があるように、比丘は８つの未曾有法（①段々に学や所作や道があること、②学処を越えないこと、③破戒不浄の比丘と共住しないこと、④『沙門釈子』と称する四姓平等、⑤増減なき無余涅槃界、⑥一味の解脱味、⑦三十七菩提分、⑧四向四果）を見て、法や律を楽しむ」と説かれたのち、「（罪が）隠されば（罪が）さらに雨と降り、顕にされれば、さらには降らず。それゆえ（罪を）隠さず顕にせよ、そうすれば、さらに降ることはない」とウダーナを唱えられる。（相応経の五分律「遮布薩法」　大正 22　p.180 下は仏在処を瞻婆国恒河辺とし、十誦律「遮法」　大正 23　p.239 中は瞻婆国とする）

［33］『中阿含』094「黒比丘経」（大正 01　p.576 上）：そのとき鹿子母毘舎佉の子である迦羅が釈尊のもとにやって来た。釈尊は闘諍を好む彼を見て、比丘らに「七悪法（①闘諍を喜み、②悪欲であり、③犯戒し、④瞋纏などがあり、⑤同梵行者を経労せず、⑥諸法を観ぜず、⑦宴坐をしないこと）をなす者は、涅槃を得ることができない。その反対に、七善法（①闘諍を喜まず、②悪欲を止め、③犯戒せず、④瞋纏などがなく、⑤同梵行者を経労し、⑥諸法を観じ、⑦宴坐をすること）を成就する者は、涅槃に至り、同梵行者の恭敬礼事が得られる」と説かれる。

［34］『中阿含』118「龍象経」（大正 01　p.608 中）：そのとき釈尊は晡時に宴坐より出定して、優陀夷に「東河（Pubba-koṭṭhaka）で一緒に沐浴をしよう」と告げられた。ときに釈尊は彼を引き連れて東河へ向われる。

［35］『中阿含』154「婆羅婆堂経」（大正 01　p.673 中）：そのとき婆肆咤と婆羅豆婆遮という２人の梵志族が出家して仏道を行じていた。ところが梵志らが「梵志の種姓は勝れていて、他の及ぶ所ではない。梵志は梵天の口より生じ、梵天の化する所である。汝らはどうしてそれを捨て去ったのか。汝らの所行は大過失である」と非難した。このとき釈尊は晡時に宴坐より出定して、露地にて経行し、比丘らに説法されていた。そこへ彼ら２人がやって来ると、釈尊は「梵志らに非難されることはないか」と尋ねられた。彼らが事情を打ち明けると、釈尊は「我は梵志のように『生まれながらにして勝れている』と説かないし、種姓や驕慢を説かない。身が清浄であるか、穢垢であるかは種姓によるのではない。その行為に依るのである。釈迦族は波斯匿王に対して宗主の礼を執るが、かの王は我に対して師の礼を執る。それは王が法を重んずるからである」と教誡し、四姓や沙門の起源について説かれる。

［36］『中阿含』202「持斉経」（大正 01　p.770 上）：そのとき鹿子母毘舎佉が子どもや婦人らの眷族を引き連れて、釈尊のもとを訪れた。釈尊は「斎には、放牛児斎と尼犍斎と聖八支斎がある。①放牛児斎は、日々の牛の飼育に、なすべきことをあれこれと考えるように、斎を持する時にも同じで、昼夜にわたって欲に執着するから、果報がない。②尼犍斎は、『刀杖を捨てよ』と非暴力を教え、１５日の従解脱を説く時には、衣を脱いで東方に向って『我に父母なく、父母あるにあらず。我に妻子なく、妻子あるにあらず』などと唱え、無所有を勧めるが、やはり果報がない。③聖八支斎は、八斎戒（離殺生、離不与取、離非梵行、離妄語、離飲酒、離高広大床、離華鬘・瓔珞・塗香・脂粉・歌舞倡伎・往観聴、

離非時食）を行じたのち、五法（憶念如来、憶念法、憶念衆、憶念自戒、憶念諸天）を修習するので、死後、化楽天に生れる」と説かれる。

［37］『中阿含』204「羅摩経」（大正 01　p.775 下）：そのとき釈尊は晡時に、宴坐より出定して、阿難に「一緒に阿夷羅河（Aciravatī）で沐浴をしよう」と告げられた。このとき阿難が比丘らに「羅摩という梵志の家へ行くように」と告げると、彼らは羅摩の家へと向った。ときに釈尊は阿難を引き連れて阿夷羅河で沐浴されたのち、阿難の勧めで、羅摩の家へ赴かれる。（相応経の *MN.026*‘*Ariyapariyesa-na-s.*’　聖求経　vol. I　p.160 は仏在処を Sāvatthī Jetavana Anāthapiṇḍikārāma とする）

［38］『雑阿含』064（大正 02　p.016 下）：そのとき釈尊は晡時に禅より覚めて、講堂を出て集会の前に、座を敷いて坐られた。このとき釈尊は「法は吾我有ること無し、亦た復た我所なし。我は当有にあらず、我所は何に由りてか生ぜん。比丘がこれより解脱せば、則ち下分結を断ぜん」と優檀那の句を唱えられた。すると一人の比丘が「それはどのように修するのか」と質問した。釈尊は「『五蘊は無常であり、苦であり、我にあらず、我所にあらず』と、このように解脱する者は、五下分結を断じている。さらに四識住（色識住、受識住、想識住、行識住）を断じて、涅槃を得る」と説かれる。（相応経の *SN.022-055*　vol.Ⅲ p.155 は仏在処を Sāvatthī とする）

［39］『雑阿含』457（大正 02　p.117 上）：そのとき釈尊は晡時に禅より覚めて、講堂の陰に座を敷き、集会の前に坐られた。そして比丘らに「界を縁ずるが故に説を生ず、界ならざるにあらず。界を縁ずるが故に見を生ず、界ならざるにあらず。界を縁ずるが故に想を生ず、界ならざるにあらず」という優檀那の句を語られた。すると釈尊の背後で扇を煽いでいた跋迦梨が「三藐三仏陀に於て、三藐三仏陀に非らざる見を起すのも、界を縁じて生ずるのか」と質問した。釈尊は比丘らに「それも界を縁じて生ずる。凡夫界とは無明界である。下界を縁とすれば下説や下見、乃至下受生を生じ、勝界は勝説や勝見、乃至勝受生を生ずる」と説かれる。（相応経の *SN.014-013*　vol. II　p.153 は仏在処を Ñātika Gi ñjakāva-sathe とする）

［40］『雑阿含』994（大正 02　p.259 下）：ときに釈尊は晡時に禅より覚めて、婆耆舎のもとへ病気見舞いに来られた。このとき釈尊が彼の臨終の床で「そなたは心が染著せず、解脱して、顛倒より離れているか」と尋ねられると、彼は「諸の顛倒を離れている」と答えた。さらに釈尊が「どのように離れているのか」と尋ねられると、彼は「我が六識は過去の六境を顧みず、未来の六境を楽しまず、現在の六境に執着しないので、心は解脱して、諸の顛倒を離れて三昧に住する」と答えた。この後、彼は偈を唱えて亡くなる。

［41］『別訳雑阿含』 257（大正 02　p.463 中）：ときに釈尊は病気の婆耆舎を見舞われた。彼は「今日、私は涅槃に入るので、最後に釈尊を讃歎したい」と告げて、偈を唱える。

［42］『雑阿含』1023（大正 02　p.266 下）：ときに釈尊は晡時に禅より覚めて、巨求那の房を訪れられた。このとき釈尊は彼の病気を見舞い、臨終の床で教えを説かれた。釈尊が去られたのち、彼は命終した。ときに阿難は彼の舎利を供養したのち、釈尊の居られる祇樹給孤独園へ戻る。

［43］『雑阿含』1024（大正 02　p.267 中）：ときに釈尊は晡時に禅より覚めて、阿説示

のもとへ病気見舞いに来られた。このとき阿説示が「病気に罹る前は心安らかであったが、今、それが出来ない」と告白した。そこで釈尊は「『五蘊は我であり、異我であり相在す』と見ずに、『貪欲と瞋恚と愚癡を尽し、すべての漏を断じて解脱する』という覚知をなすべきである」と説かれる。この教えを聞いた彼は心が解脱し、歓喜し、身の病も癒える。（相応経の *SN.022-088*　vol.Ⅲ p.124 は仏在処を Rājagaha Veḷuvana-Kalandakanivāpa とする）

［44］『雑阿含』1153（大正 02　p.307 中）：そのとき釈尊は晡時に禅より覚めて、講堂の東の露地で経行されていた。ときに健罵婆羅豆婆遮が釈尊のもとにへやって来て、釈尊の面前で麁悪語を発して非難した。ところが釈尊がそのまま経行を続けられると、彼は釈尊の後に続き、やがて経行を終えられると、「瞿曇よ、負けたか」と言い放った。このとき釈尊は「勝てる者は更に怨を増し、伏せる者は臥するも安からず。勝伏二つ俱に捨てなば、これ安穏に眠ることを得る」と偈を唱えられた。この教えを聞いた彼は懺悔の偈を唱え、その場を立ち去る。（相応経の *SN.007-001-002*　vol.Ⅰ p.161 は仏在処を Rājagaha Veḷuva-na-Kalandakanivāpa とし、別訳雑阿含 076　大正 02　p.400 下は舎衛国祇樹給孤独園とする）

［45］『雑阿含』1154（大正 02　p.307 中）：そのとき釈尊は舎衛国の東園鹿子母講堂に住されていた。晨朝、釈尊は乞食をするために舎衛城へ向われる。（相応経の *SN.007-001-004*　vol.Ⅰ p.164 は仏在処を Rājagaha Veḷuva-na-Kalandakanivāpa とし、別訳雑阿含 077　大正 02　p.400 下は舎衛国祇樹給孤独園とする）

［46］『増一阿含』032-005（大正 02　p.676 中）：そのとき釈尊は５００人の比丘らと共に居られた。７月１５日の受歳日（自恣の日）、釈尊が露地に於て、阿難に「揵稚を打て。受歳を行う」と命じられると、阿難がその意味を偈で尋ねた。釈尊は「受歳は三業を浄む、身口意の所作なり。両々の比丘がお互いに、自らなした所の短を陳ぶ。還って自ら名字を称して、今日、衆歳を受けんと。我も亦た、意を浄めて受けん。唯だ願わくば、其の過をたづねよ」と偈を説かれた。阿難が揵稚を打ち終ると、釈尊は席次に従って座した比丘らに「我に過失がなかったか」と、３度尋ねられた。比丘らが黙っていると、舎利弗が「釈尊に過失はありません。ところで、我々はどうでありましょうか」と尋ねた。すると釈尊は「そなたの身口意の所作に非行はない。他の比丘らも過失はない」と応えられた。このとき婆耆舎が僧伽を称讃する偈を唱えた。そこで釈尊は比丘らに「我が声聞中で、第一の造偈の弟子は、婆耆舎である」と告げられる。

［47］『十誦律』「皮革法」（大正 23　p.183 中）：そのとき釈尊は晡時に禅より覚めて、堂を下りて露地で経行された。このとき比丘らも革屣を履き、釈尊に随って経行したので、釈尊は「外道出家でさえ弟子は師を尊重して、革屣を履かずに師に随って経行する。そなた達はどうして革屣を履いて経行するのか」と呵責されたのち、比丘らに「今より仏前と、和尚や阿闍梨と一切の上座の前で、あるいは仏塔の中、温室や講堂などで、革屣を履いてはならない」と制戒される。